

Title	こんな大人になりたくない
Author(s)	牟田, 隆郎
Citation	聖学院大学論叢,19(2) : 61-72
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=55
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

こんな大人になりたくない

— 聖学院大学生の見方 —

牟 田 隆 郎

The Traits of Adults that Adolescents are not fond of

— Based on research conducted among students of Seigakuin University —

Takao MUTA

Key words: Egocentrism, Altruism, Affirmation, Negation

はじめに

異質なものに会おうと、人はそれに対して好奇心をそそられるか、嫌悪感・警戒感を抱いてしまうようだ。早い話しが、人が他者を見つめる眼差しの中に、この態度の違いが現われる。人は圧倒的のと言ってよいほど「他者」に強い関心を抱いている。既に脳に「他者」に関して解析する神経細胞がたくさんあると言ってもしまえばそれまでだが、私たちは否応なく「他者」にまみれて生きるように出来てしまっている。

生きていく過程で私たちは他者を常に眺めているわけだが、その眺め方にその人自身の「成り立ち」が深く関与している。たとえば、まわりのことを割合肯定的に受け入れている人がいるかと思えば、何かと否定的に受けとめてしまう人もいる。

青年期の人たちは、成長・変化のスピードが著しく、なおかつ、独立した自分イメージというものとの確立が大切な時期に差しかかっている。つまり、早急にいわば「内部を固める」ことが彼ら・彼女らに要求されている。既存のものを壊しつつ新しいものを作り上げていく心の内的作業が必要とされるわけだが、他者や自分への眼差しは、肯定－否定の狭間を揺れ動きやすい。

そのようなある意味で不安定な状態にある時、他者の示す有り様は恰好の参考事例となる。他者は自分の姿を映す「鏡」であり、他者の中に、自分の在り方をどうしたらよいかのヒントが隠されている。もちろん、人はそのことをいつも意識しつつ他者を見つめてはいない。そうではなく、例えば「あいつ恰好いいな」とか「あの人もあれ。ちょっとおかしいんじゃないの」とか「いい感じ」

とか「嫌な奴」とか、とにかく、何らかの評価的なものを感じ取りつつ眺めている。

彼ら・彼女らのこの他者の見方が、実は彼ら・彼女らがどのように「自分」というものを築き上げてきたかをはかるひとつの参考資料となる。先にも述べたが、ひとはどういう自分を作り上げてきたかによって、どのようにまわりを捉えるかが決まってしまうからである。

本稿では、青年期の渦中にある大学生が、「大人」という幾分異質なところを抱えもった他者のことをどのように捉えているかをもとに、まずは出された大人像の検討、次いで彼ら・彼女らのパーソナリティ形成が、今どのような様相を呈しているのかを推測する。その場合、態度がより鮮明に出やすいと思われる「反面教師」的側面、すなわち大人の否定的な面について問いかけを行ない、考察する。いずれ彼ら・彼女らも「大人」になるわけであり、その点で「大人」とは身近かな存在でもあり関心も高く、率直なコメントが寄せられるものと思われる。

なお本論では、積極的に「大人」とは何か、「大人」とはどのような存在かといった前提は設けない。あくまで彼ら・彼女らが抱く「大人イメージ」がもととなっている。またある面彼ら・彼女らは既に大人の側面ももっていると考えられるが、ここでは学生と社会人といった区別に則って、彼ら・彼女らはいわば「大人手前」の存在として考えている。

否定的なものの意味

本稿は、大学生に対し『こんな大人になりたくない』という観点から自由に意見を記述してもらったものの考察を主題としているが、その考察に入る前に、「否定的なもの」について少し考えておきたい。なぜならば、この彼ら・彼女らの記述は、もっぱら否定的なものに関わるものだからである。

さて「否定的なもの」とは何であろうか。言辞的に言えば、「肯定的なもの」の反対ということになるが、ことはそう単純ではない。否定的であれ肯定的であれ、その意味を考え出すと何やら訳が分からなくなりそうであり、これは哲学の問題でもあると思うが、本稿ではあまり深入りしない。

そうではなく、ここではまず人間の出生からその後の成長というところに目をつけよう。生き物が「生きる」というその基本的な意味とは、しばらく生き続け（命を守り）、子孫を残すということではないだろうか（もっともそれを可能にした生物だけが今日地球上で生命を営んでいるわけであるが）。そうであるとすれば、生き物が自らの生命の危険をもたらすものを避け、その安全を保障するものを求める、というのが自然な成り行きであろう。生き残るチャンスをより高めるためである。

このことと深く関連すると思われるのが、快－不快の感覚であろう。生まれたばかりの赤ちゃんにおいては、この快・不快の感覚が大きな意味をもっている（特に不快感のほうが、より強いインパクトがありそうだが）。今現在の環境が自分の生命維持にプラスかマイナスか、それを快・不快の

レベルで感知している。

恐らくこの「不快なもの」が、その後の人生における「否定的なもの」のひとつの源泉となるのであろう。快－不快という感知の仕方は、まわりの世界をざっくりと二分してしまうある意味で大胆な分け方である（実は人間の見方でもあるが）。世の中の事象は、あれかこれか、白か黒か、とはっきり二分されるものはむしろ少ないと思われる。ましてや人間事象については、両極の間の曖昧な中間事象が殆んどであると言ってよいであろう。

人生の最初期における快－不快の二分状況は、もちろん中間のいわば灰色の状態はあるにしても、生命を守り維持するためには、危険なもの・安全なものをはっきり区分けして認知する必要性がかなり高いことを示している。

赤ちゃんが辿るその後の人生において、快・不快の感覚はずっと心身の基盤に残り続けるが、人はその意味するところにはあまり関心を示さない。快・不快はそれだけ根深い感覚であり、「自ずとそう感じてしまう」というレベルに止まりやすい。もっとも人がある程度知恵がついてくると、意味づけをする能力は向上し、快・不快の理由を見つけ出すこともできなくはない。しかしその多くは、快なもの・不快なものを他の概念（言葉）に置き換えて説明するトートロジー的なものの範囲を抜け出てはいない。

大学生においてもこの間の事情は同じであり、自分のまわりのさまざまな対象・事象に対し、「ウザい」「キモい」と、いわば感覚レベルの捉え方をしている人が多いようだ。そうであるとするとその捉え方は、深いところにある快－不快感覚レベルに基づいている可能性もあり、その点で、対象・事象の弁別が「訳もなく」とか「理由もなく」「何故だか分からないが」といった調子で為されていることになる。これは無意識的意味づけに近いものであり、ひとたび対象に、ある態度・姿勢をとると、簡単にはそれが変更されにくいということになる。

今回彼ら・彼女らに尋ねた『こんな大人になりたくない』についての意見も、その理由の詮索をする手前のところで出されているものと思われる。従って彼ら・彼女らの見方は、ある意味素直に率直にどのような感覚で「大人」を見ているか、そのありのままを表明していると見なすことができる。

「ある」と「ない」の問題

「否定的なもの」が「不快感情」と根っ子でつながっていると述べたが、「否定的なもの」は言語表現のレベルでも生じる。「これはリンゴである」という叙述の「ある」を単純に否定すると、「これはリンゴで（は）ない」となる。

肯定文を否定文に変えたということだが、事態は単に「ある」が「ない」に変わっただけではなさそうだ。

こんな大人になりたくない

そもそも目の前の事物を写しとろうと使い始めたのが「記号」だと思うが、言語はこの記号を基礎に成り立っている。一方その流れの延長上で、事物の「不在」にも着目がなされるわけであり、そのことが否定詞の起源ともなっている。

肯定文で示されるものは、現前の事実をそのままに描写しようとするものであるが、否定文においては、その意味するところ・指示するところはちょっと複雑である。肯定文はそれはそうである、と受けとめやすい気がするが（そのような構成をとっている）、否定文は「不在」が根底にあるとすれば、それに付け加えて何々で「ある」がさらに付け加わる可能性をもつ。『これはリングではない。柿である』というようにである。

総じて「ない」の世界は「ある」の世界に含み込まれているようだ。「ない」は「ある」を前提としているとも言える。それは私たちが「存在する」すなわち「ある」の世界の側にいて思考しているからであろう。

『こんな大人になりたくない』の表現にも「ない」がついており、それへの回答に否定的な大人の姿・状態が示されている。しかしこの場合においても、否定的な大人の姿・状態を示すその背景に、肯定的なあるいはあるべき・望ましい大人の姿・状態が含意されていると考えるべきであろう。それら「あるべき」姿の大人の像にどこか無意識的に照らして、そうではない否定的な大人の像が呈示されているのであろう。

相手の様子に不満や腹立ち、怒りなど否定的なものを感じるということは、そう感じるその人の中に、既にある種の規準なりイメージなりが備わっているものであり、その時点ではそれらは不在なのである。かくして否定的なものは、肯定的なものの舞台の上においてのみその姿を現わすのである。

そうであるとする、ここでひとつには彼ら・彼女らの回答をもとに、彼ら・彼女ら自身のパーソナリティの様相を窺い知ると同時に、もうひとつには、やはり大人たち自身のあり方について窺い知るヒントもそこにあることになる。「立派な大人」が不在かもしれないのである。

学生たちの回答結果

資料は2005年度の筆者の「臨床心理学」の講義において、学生たち（およそ100名）に記述してもらったものに基づいている。記述方法は、テーマ『こんな大人になりたくない』のみ指示し、あとは自由に記述してもらった。回答結果を似たものどうし集計したが、その分類の方法は特に規準など設けずに行なった。原則として彼ら・彼女らの表現をそのままに生かすよう努めたので、内容的に似たような事柄を指している場合でも、表現の違いにより、異なる項目として取り上げられていることもある。また各々の項目が完全に独立している訳でもない。

学生ひとりが複数の特徴を書き出している場合もあれば（こちらのほうが割合が多い）、ただひと

つだけ書き記している場合もある。結果、複数の項目にまたがってカウントされている学生はかなりの多い。

なお、全体として多数のコメントが寄せられたが、ここでは3名以上によって指摘された項目(35項目)のみ掲載する。1～2名によって指摘された項目にも仲々に興味深いものがたくさんあるが、その本質は掲載した項目におよそ含意されているものとする。以下にその35項目を示す。()内は人数である。

①自己中, 自分勝手, わがまま	(21)	②マナーを守らない, マナーが悪い	(16)
③ひとのはなし, 意見, 批判を聞かない	(15)	④ひとを見下す, ばかにする	(10)
⑤自分の意見・主張を押しつける	(8)	⑥よく文句を言う	(7)
⑦まわりに迷惑をかける	(6)	⑧嘘をつく, 欺く	(6)
⑨私利, 私欲が強い	(6)	⑩思いやりのない	(5)
⑪ひとをいじめる, 傷つける	(5)	⑫金使いがだらしない	(5)
⑬言動に責任がとれない	(5)	⑭家族を大切にしない	(4)
⑮頭が固い, 頑固	(4)	⑯毎日何かに追われ, 楽しみがない	(4)
⑰子どもの教育・躾けができない	(4)	⑱ひとに厳しく, 自分に甘い	(4)
⑲常識がない	(4)	⑳自分の非を認めない	(4)
㉑ゴミを捨てる, ポイ捨てる	(3)	㉒自分の主張をもたない, できない	(3)
㉓金で何でも解決できと思っている	(3)	㉔犯罪・悪いことをやり続ける	(3)
㉕感謝の気持ちを忘れている	(3)	㉖場の空気を壊す, 空気を読めない	(3)
㉗ひとにやさしくできない	(3)	㉘ひとの気持ちを分かろうとしない, 分からない	(3)
㉙仕事に追われている, 忙しい	(3)	㉚大人になりきれていない	(3)
㉛子どもの心を傷つける	(3)	㉜自分のことを自慢する	(3)
㉝格好悪い, だらしない格好	(3)	㉞夢や目標がない	(3)
㉟仕事せずにふらふらしている	(3)		

諸項目を通じて浮かび上がる否定的「大人」イメージ

以上の35項目を通覧してみよう。指摘人数の多寡はもちろんある(21名～3名)が、何となく『こんな大人になりたくない』の大人イメージが浮かんできそうである。まずこのイメージがどのようなものであるかを少しずつまとめていこう。目のつけどころはいろいろ考えられるが、当該の「大人」における

1. 対他者 2. 対社会 3. 対自己

に分けて考える。

1. 対他者

ここで言う「他者」とは、家族・友人・同僚・親戚・職場・各種集団などにおける何らかの関係ある人たちを指す。ある程度身近な距離の人間関係を営んでいる相手ということになる。もちろん身近な人間関係とは言っても、その人間たちの背後には「社会」もあり、また何よりその本人が中心にいる（自己）わけであるから、対他者的側面と他の2側面（対社会、対自己）は重なり合っていることが多い。

さて、まずは「自己中心的」という特徴を挙げねばなるまい。この特徴こそ、各項目に濃い薄いの違いはあるにしても、幅広く関与している。

文字通り『①自己中、自分勝手、わがまま』の項目が代表例であるが、他にも『③ひとのはなし・意見・批判を聞かない』『⑤自分の意見・主張を押しつける』『⑧ひとに厳しく、自分に甘い』『⑩自分の非を認めない』『⑫場の空気を壊す、空気を読めない』『⑭ひとの気持ちを分かってほしい、分からない』『⑯自分のことを自慢する』などが挙げられるであろう。

次の特徴としては、「他者を見下す、傷つける態度」が浮かび上がる。『④ひとを見下す、ばかにする』『⑥よく文句を言う』とか『⑪ひとをいじめる、傷つける』『⑬子どもの心を傷つける』などであるが、『⑫ひとにやさしくできない』もこの中に入るかもしれない。

三番目として「誠実さや思いやりに欠ける」という特徴も見逃がしにはできない。『⑧嘘をつく、欺く』『⑩思いやがない』『⑭家族を大切にしない』『⑮感謝の気持ちを忘れている』『⑫ひとにやさしくできない』などであろうか。

まだ他にも「対他者」に関する特徴はありそうだ。それは「無責任」とでも言おうか。『⑦まわりに迷惑をかける』『⑧嘘をつく、欺く』もそうであろうし、『⑬言動に責任がとれない』『⑰子どもの教育・躾けができない』『⑱常識がない』そして『⑫自分の主張をもたない、できない』『⑬金で何でも解決できると思っている』というところか。

2. 対社会

ここで現われる否定的大人のイメージは、まわりの人たちとの具体的関係の中にその姿を現わすというよりも、もっと一般的な日常社会の中での大人の様子を描写したものである。

特徴をまとめるとすれば「反社会性、非社会性」というところか。『②マナーを守れない、マナーが悪い』『⑱常識がない』『⑲ゴミを捨てる、ポイ捨てする』『⑳犯罪・悪いことをやり続ける』あるいは『㉓格好悪い、だらしない格好』や『㉕仕事せずにふらふらしている』であり、『⑦まわりに迷惑をかける』もここに入るかもしれない。

いずれも「社会人」として体を為していないという青年たちの批判が向けられているようである。

3. 対自己

この「対自己」で取り上げるのは、その大人の生き方や性格特徴が前面に出ていると思われるものである。

特徴としてまとめれば、「未熟で大人気ない」ということになろうか。『⑨私利、私欲が強い』『⑫金使いがだらしない』『⑬金で何でも解決できと思っている』と金銭や欲にからまるものから、『⑮頭が固い、頑固』と性格的な片寄りも指摘され、『⑯毎日何かに追われ、楽しみがない』『⑰仕事に追われている、忙しい』と見抜かれており、なおかつ『⑱夢や目標がない』と責められる。挙げ句の果て、『⑳大人になりきれていない』と、とどめを刺される。社会に生きる一個の人間として、その生き様を値踏みされ評価されている。ここでの結論を端的に述べれば「大人になりきれていない」となる。

以上の3観点をもとに否定的な「大人」イメージをざっとまとめると、まわりの人たちに対して自己中心的に振舞い、時にはひとを見下す態度をとったり傷つけたりする。そこには誠実さや思いやりが欠けており、何かと無責任な態度をとっている。社会においては反社会的な行動や態度をとったり、はたまた社会性の欠けた姿を晒しており、社会人とは言い難い。当然そこには未熟性があることが窺え、未だ「大人」になりきれていない様が見てとれる。

もちろんこのまとめは、各項目の醸し出す否定的要素をつなぎ合わせたものに過ぎない。けれども、そのような否定的なことばかりで固まっている人はこの世にいない……とは言い切れない気もする。似たような感じのところをもった人は結構いるのではないか。それだからといって嘆くこともないであろう。ひとを見る目を私たちがもってさえいけば、このような他者を他山の石として、私たちは身を整えていけばよいのであるから。

こんな大人になりたい・こんな大人が望ましい

学生たちの捉える否定的な大人像がある程度まとまって見えてきたが、項目を読み進むにつれ、学生たちの批判のその向うに、彼ら・彼女らの「大人」に対する希望や期待が垣間見えてくる気がする。大人への思いが、さらには自分へのメッセージがそこから伝わってきているようだ。

形式的には「否定」の否定は肯定（論理学）であるが、『こんな大人になりたくない』を仮に否定するとすれば、「こんな大人であってほしい」「こんな大人に自分もなりたい」という声が聞こえてこないだろうか。恐らく若者たちは、大人たちを批判的に眺めるその一方で、自身が内に抱えもつ不確かさを同時に感じとっているのであろう。

そこで彼ら・彼女らが出した否定的な大人へのコメントは、実は、彼ら・彼女ら自身の現在の姿を重ね合わせて出されていることになる。反面教師の姿を、自分たちのまわりの大人の姿の中に見い出すとともに、自ら自身の姿においても克服すべき課題がそこにあると、うっすら意識している

と考えられる。

そうであるとする、彼ら・彼女らが指摘した項目は、そのまま彼ら・彼女ら自身が引っかかっている不全なる自己像と関係していることになる。そこで人数が比較的多い上位項目で示される諸特徴ほど、多くの若者が気に懸けている事柄ということになりそうである。

当たり前のはなしであるが、ほとんどの場合、ひとは自らがある程度気付いて意識していることしかまわりに発見できない。あるいは、だいたいひとは普段どこか気にしていることしかまわりに見ない。その時発見するもの見えるものは自分以外のまわりにあるものだが、そう見る自分というものが、いわばこちら側にあるわけである。

青年たちの特徴

そこで現在の青年たちの抱えている特徴は、指摘した人数の多い項目ほどその面を暗示していると考え。項目をもう一度見直してみよう。『①自己中、自分勝手、わがまま (21)』が最多の指摘を受けている。彼ら・彼女らのかなりの者が自分を自己中心的であると捉え、かつそれがやゝ問題であると考えているのではないか。この見方は、今の世の大人たちの若者観と重なっていると思われる。「自己中」なる用語は、もっぱら若者の困った特徴を示すものとして世間で用いられているからである。

しかし、もし青年たちが自分たちのもつマイナス面としての「自己中」をどこか意識しているすれば、それはむしろ頼もしいことである。自己洞察があってこそ人は変わることがより容易になる。その場合の変わるとは脱自己中であり、そうなれば他者との望ましい共存も視野に入ってくる。

2 番目に多かった項目を見てみよう。『②マナーを守らない、マナーが悪い (16)』である。これは人が社会とどのように関わっているのかいないのか、その態度に関係するものである。社会性の獲得のテーマでもある。マナーとは、はっきり明文化されたものではなく、人が自らの内に築いていく、他者と共有する暗黙の共存ルールである。

そのようなマナーというものを未だマスターし切れていない、という感が青年たちにもあるであろう。学生といういわゆる青年期のモラトリアム（大人になる前の一種の執行猶予期間）のさ中にある彼ら・彼女らは、時々その「特権」としてマナーを破ることがなくはない。けれどもその態度・行動は、いずれ自らは是正すべきものとする感覚を、彼ら・彼女らはどこかに抱いているのではないだろうか。

もちろん、マナーを守れないことに対する罪悪感もそこそこ彼ら・彼女らの内側に育ちつつあるものと思われる。またこれらのことと並行して、「正義感」獲得の課題も進行中なのであろう。

3 番目から 5 番目の項目を次にまとめて見てみよう。『③ひとはなし・意見・批判を聞かない (15)』『④ひとを見下す、ばかにする (10)』『⑤自分の意見・主張を押しつける (8)』である。③

と⑤は丁度対極を為すようである。そこに出ているのは、自分と他者との「押し」の強さというか、格の争いというか、存在意義を賭けた主導権争いというか、一種のせめぎ合いの構図であろう。

④の『ひとを見下す、ばかにする』をも考え合わせると、やはりこれらは自らの存在意義や格の上下というものに関わるようである。もちろんそれらには「未熟」という影が付き添っているような気もするが、青年たちが己れの位置（価値）づけに敏感になるのは当然のことであろう。未だ固まり切っていないからこそ、自己評価も揺れ動きやすく、そこに優越感と劣等感がないまぜになっている。

6番目の項目は『⑥よく文句を言う（7）』である。人は不全感を多い抱いていると、それが時に文句となって外に現われる。まわりに対しても自分に対しても文句が多くなる。文句を外に出すということは、その場合不全感解消のための一手段なのであるが、まわりとの関係では、波が立つてしまうことにもなりかねない。

いずれにせよ青年期は、あるいは人が未熟なところを抱えていると、不全感を直接的な手立てですぐに解消しようという傾向がまだ強い。文句を言うということはそういうことでもある。自分色に性急にまわりを染めようとするとも言える。人間関係スキル、社会的スキルをまだ十分に身につけていない彼ら・彼女らであれば、結果的に文句が多くなるのもいた仕方ないということか。まわり（自分）が不満の種だらけになっているわけである。

そのまわりに生じ現われていることの真の姿を見極めつつ、自らの心をコントロールしていくという難しい課題は、いずれにせよ一生涯続くべき性質をもっている。青年たちはその課題に取り組み始めているわけである。

大人たちの現状

溯るが、学生たちの回答を総覧してまず感じたことは、ここぞとばかり大人に対して普段から抱えている不満をぶちまけている、ということであった。一応大人の側にいるつもりである筆者は、どこか自分も責められている、という気がしたものである。

否定的なものは恐らく何であれ、それを指摘されかつそれを見つめるのは、ちょっと辛いところを伴う。それこそ「不快感」がそこに生じやすいからである。しかし、ことは結構深刻かもしれないのであり、これからはちょっと学生たちの直接的指摘から離れ、自分たち大人の現状を点検してみよう。

まず否定的大人像のうちの反社会的な行動をとったりする人は、これはやはり否定されて当然であろう。そのような困った人たちは、いつの時代・社会にも一定程度いた筈であるが、実はもっと気になるのは、一般の大人たちにおける「人間性の変質」とでもいうものがあるのではないかという点である。

この「変質」は2方向から考えられる。まず考えられるのは、大人の「未成熟化」という変質である。この場合は、「大人未満」で人としての成熟を止めてしまう人たちがいるのではないかと、いうことである。

様々な局面を見せ、様々に急展開をしている現代社会に生きる人たちにとって、そこで生き延びるための戦略は、大まかに言って2通り考えられる。ひとつは全方位適応態勢をとるということである。それはまたいろいろな「顔」を持つということになるが、しかしそのやりくりをうまくやり通せる人は、そうたくさんいるとは思えない。いずれにせよこの場合、人格の統合はかなり難しくなりそうである。

そこで多くの人たちは、全方位適応ではなく、むしろ限定的適応を試みようとしているのではないかと。これが2つ目の戦略である。戦線を拡大して補給路が伸び切ってしまう危険を避け、自陣地に籠って凌ごうというわけである。敢て自分が生きる世界を狭くするのであるが、このほうがエネルギーのロスが少なくなる。大人未満のところに自らをとどめておこうとするのである。

つまり、自己中心的に自分の都合や利益をまず確保し、他者への配慮はその分薄くなり、時に無責任になったり、自らのプライドを守るために、他者を見下す態度をとったりすることになる。

大人の「変質」で考え得るもうひとつの方向というのは、既に「大人」であった人たちが、先に述べた社会状況に晒され、やはり身を守るために一種の「退行」を起こしているという変質である。場合によっては、この間の苛酷な経済状況からダメージを受けた大人たちも、かなりいるものと思われる。生き延びるためには、他者や社会のことはまず措いて、自分を守ることが第一要件となる。この人たちは大人未満で止まったのではなく、大人未満の状態に戻ったということになる。

現代の人間

ここからは学生と大人に分けず、青年以上の年代の人たち全てについて考えていく。

さて大人未満の人たちが増加しているとすると、いろいろ危惧されることが出てくる。何といても、人間関係に紛れ込む一種の「冷たさ」が問題となろう。人と人とが交わす温もりが少なくなっていくのである。あるいは人間関係が乾いていくと言ってもよいかもしれない。他者との関係は、自分にとって利があるかどうかが大切な目安になってくる。むしろ契約関係を結ぶほうが割り切りやすく都合のいいものに思えてくる。

さりとてこれではどこか寂しさが漂ってくるのも確かであろう。人間とは「他者まみれ」で生きていくように、既に作られているからである。

そこで他者とのコミュニケーションをどうするかというわけだが、現代社会には便利なものがある。直接に他者と触れ合わなくても、その隙き間を補填するものがある。今のところ若い人たちが中心であるが、電話やメールを手軽に使いこなせる現在、それだけでもたくさんの人と繋がっている

という感覚は一応保てることになる。付き合う（コミュニケーションする）人が少なくとも、サイト上で「付き合う」ことができなくもない。

しかしやはりこれらは偽似人間関係であり、そこには「自己中的コミュニケーション」の様相が濃くなっていることが窺える。自分の願望・欲望に色どられた恣意的関係に傾きやすいのである。悪く言えば、相手を手段化・対象化してしまうのである。それがお互いどうしであるから、そのやりとりは仮想もいいところであり、時には、奇妙なもの・滑稽なものであるかもしれないのである。

けれども、もしかしたら新しい人間関係のあり方が、特に若い人たち中心に遂行されつつあるのかもしれない。しかし恐らくそういう社会とは、個人にとって一部の了解可能な仲間以外は、何か訳の分からない人たちばかりが占める社会に違いない。頼りになりそうなのは、もっぱら外部からもたらされる情報であり、ほとんどの他者は、あまり信じられない対象となる。いや「信じる未満」の対象と言ったほうが正確であろう。「関係ない人たち」なのであるから。

現実の社会関係ではバラバラに存在する人たちが、仮想社会では活発にコミュニケーションする。そこにおいて中心を為すのは「幻想」であり、各人の幻想が交錯する。けれどもそこに共同幻想空間が成立するかどうかは怪しいものである。他者に対する責任性が保証されるとは限らないからである。

気ままに手軽に参加したり退いたりする関係には、多分相手に対する人としての責任感は育ちにくい。そのようないわば「密」な関係が成り立たないからである。

これからの人間

それでは私たちは、これからどうしたらよいのであろうか。どのような社会を、どのような人間関係を、そしてひとりひとりがどのような人間になっていったらよいのであろうか。差し出がましいことを言うようだが、皆がこのようなことを考える必要性が、現在かなり高まっているものと思われる。人間の「質」とでもいうものが劣化しつつあるようであり、そのマイナス面が、特に社会的弱者を犠牲にするかたちで現われているようだ。

経済的にかなり裕福になり、また様々な技術革新により、私たちの生活は一見「豊か」になったかに見える。しかしその内実は、お互いの関わりが薄く表面的なものになりがちで、便利な外部高機能装置（文明の機器）を使用するせいで、人間本体は無能力化しつつあるというものである。

豊かな社会の到来は、中味の貧しい利己的人間を生み出しやすくなる。それでいて、各人は結構孤独感を感じやすくなっている。しかし同じ平面上の出会いが難しく、勝手な幻想を抱くかたちでの一方的な関係に悪くするとなってしまう。

アイデンティティとは自己中心性の衣をまとったものになり、なまじ「自分」というものを作り上げることの行き過ぎた面が目立ちつつある。「自分」を作り上げるということは、あくまでひとつ

の生きやすくなるための戦略であり、完全に独立した存在だという錯覚を抱いてしまっただけは、鼻もちならない個体が輩出してしまうことになる。

私たちひとりびとりは、「他者」の重なったところにあるひとつの結び目であり、またその結び目に「他者」が映し出されている。かくして自分は他者であり、他者は自分であるという循環がそこに出てくる。

このように捉えると、これからの人間がどのようにしたらいいかのヒントがそこに見つからないだろうか。自分が、私が、己れがと力むことなく、私は他者であると割り切れればよいのである。そうすればそこに「利他性」「愛他性」というものが何の前提もいらずに沸き上がってくる。他を利する、他を愛することは即ち、自らを利し、自らを愛することでもある。反対に自らを利し、自らを愛することは、他を利し、他を愛することにもならなければならない。

言うだけなら簡単であるが、その通りに生きることは、やはり難しいものであろう。しかし各々が少しずつでもこのような生き方を現わし、そのことがその人のまわりの人たちに少しずつ染み込んでいくのならば、時はかかるにしても、未来を信じることができる。これが人間のそして社会の「質」を高めることの唯一ひとつの道である。生き様を通してしか、ひとを深く揺さぶることは困難であり、それが現象しているところ、その人の人生はその人の人生ではなくなる。